



André Liohn/ICRC

番外編

紛争の都市化と長期化

【目次】

イントロダクション	1
破壊される街	2
ヤッセルの物語	3
長期化する紛争	4
短・中・長期的ニーズに応える	5
ICRCの対応	6
犠牲を減らすために	8

戦争が都市に戻ってきた

政府軍や武装グループが、空爆、大砲、スマート兵器、歩兵攻撃、自爆、自動車爆弾、即席爆発装置 (IEDs) などの手段を用いて、市街戦を繰り広げています。そして、民間人はその真っ只中にいます。

ICRC駐日事務所は年に一度、一つのテーマに絞って紛争下の事象を掘り下げ、赤十字の活動を紹介するニュースレターを発行しています。これまで「武力紛争下の性暴力」「子ども兵士」「彷徨う人びと」を取り上げてきました。4つ目のテーマとして今回は「紛争の都市化と長期化」に焦点を当てます。

市街地で繰り広げられる戦闘

古代から、都市への襲撃や略奪は住民を死の恐怖に陥れていました。歴史上、防御する側の司令官が降伏条件を拒否すれば、民間人である住民が敵から略奪されたり、命を奪われたり、性的暴行を受けたりしたほか、手足などを切断されたり、強制的に肉体労働を強いられたりしていました。その結果、多くの人が自ら命を絶つ道を選びました。

今日、都市部に暮らす住民が再び戦争の真っ只中に置かれ、行き場を失い、負傷

し、飢え、貧困に陥り、人質に取られ、人間の盾として使われ、多くの場合戦火を逃れることを妨げられています。水や医療、電気、教育といった必要不可欠なサービスは損害を受け、質が低下し、時に意図的に攻撃されています。古代の“包囲”という戦術が復活したのです。トンネルや偽装爆弾、狙撃兵は、ドローンやデジタル戦争と組み合わせ、市街戦は長期化して、今後の戦闘の傾向となるでしょう。

こうした新たな市街戦では、一度では勝ち負けがはっきりしない状態が何年も続くことがあります。武装集団は今や茂みではなく都市に隠れていて、ゲリラ戦も街なかで繰り広げられるようになるでしょう。どちらの側も勝利することのないまま、市街戦は何百万もの人々の長い人生において慢性的な出来事となるのです。

「この苦しみはいつまで続くの？」

2017年、シリアで紛争が始まって6年が経ち、私たちのアフガニスタンでの活動は30年目に突入しました。アフリカでは、南スーダンで37年、ソマリアでは35年に及

んでいます。もっとも長いのはパレスチナ自治区で、ガザでは1948年以来活動しています。同時にレバノンでも、パレスチナ難民危機を受けて即座に活動を始め、1975年から90年まで続いたレバノン内戦や、その後の様々な紛争によって苦難を強いられてきた人々に寄り添ってきました。

紛争の長期化に伴い、いかにして効率的な人道支援を行うかは、ICRCの優先課題です。20前後のICRC現地代表部は長期化した紛争下で活動し、全体予算の3分の2がつき込まれています。

近代の戦闘の傾向を調査

ICRCは2017年5月に、中東のシリア、イラク、イエメンの現状に焦点を当てた「I saw my city die~死にゆく私の街」、2016年8月に、世界規模の現象として「Protracted Conflict and Humanitarian Action~長期化する紛争と人道支援」という二つのレポートを発行しました。今号では、この二つのレポートを中心に、国際社会が抱える重い課題に斬り込みます。

“爆撃機や爆弾を積んだトラック、ドローンから落ちる手榴弾、狙撃兵…目を向けると、至る所に自分の命を奪おうとするものばかりだった”

“人々はごみを漁って食べています。子どもに温かいスープをあげようと、木の葉を茹でている女性がいました”

【表紙の写真】

イラク・モスルの路上で遊ぶ子どもたち。戦闘により街は大きな被害を受け、多くの家や民間インフラが破壊された(2017年3月)

最新情報は
公式Twitterで配信
@ICRC_jp



ICRC



故郷シリアのホムスに戻った男性

破壊される街 ～シリア、イラク、イエメン～

「私は、自分の街が死んでいくのを目で見ました。周りの人たちが目の前で亡くなっていき、自分が壊れていくのを実感したんです。この先立ち直れるのかどうか不安だけど、そうありたい」

—サミ(29歳)、シリアのアレッポから首都ダマスカス、レバノンの首都ベイルートへと逃れる

2010年から2015年にかけて、世界中の全紛争に関連する死傷者の約半数が、シリア、イラク、イエメンの人々でした。市街地で絶え間なく続く戦闘の犠牲となったのです。

今日、都市部で目にする種類の戦闘は、あまりに日常的で、破壊的なものとなっています。民間人の死傷率は極めて高く、Action on Armed Violenceによる報告では、人口密集地域での爆発を伴う武器の使用による死傷者の92%が民間人で、他の地域で使われた場合の34%と比べても非常に高いことが示されています。

なぜこんなにも犠牲者数が多いの？

一つの根本的な理由として、戦時のルールを定めた国際人道法の尊重が全般的に欠如していることが挙げられます。この法体系は、敵対行為に直接参加しない、あるいはもはや参加していない人々を保護し、戦闘方法・手段を制限します。それは本質的に、武力紛争の影響を制限し、戦争でも人間性を

保とうとするものです。しかし、このルールが今、破られています。民間人や、病院・学校などの民間施設が攻撃目標にされ、一般の人々が包囲状態に置かれているのです。

また、武器の選択と人口過密地域での使用方法にも問題があります。20世紀に使われた大規模なじゅうたん爆撃は21世紀には使用頻度が減りましたが、民間人が住む地域における激しい砲撃は、近代戦でよく見られる特徴です。

近代の都市型紛争をめぐって、それぞれの思惑により政治的な解決策が見出されないことも、民間人が何年にもわたり執拗な暴力の犠牲となる事態を生み出している要素です。

強いられる包囲下での生活

今日の中東での市街戦は、古代の市街戦でも見られたように、“包囲”という行為によって特徴づけられます。

2016年、アレッポ東部の住民が190日間包囲下に置かれたことは広く知られています。人道支援も妨害され、ファルージャやタイズ、デリゾール、ファ、ケフラヤ、マダヤといった他の多くの都市でも、住民の苦しみは尋常ではありません。戦闘下にある都市では、物を持ち込んだり、持ち出したりすることが極めて困難なため、事実上包囲状態にある場合もあります。

国際人道法は、敵の軍事施設に対して包囲という手段をとることは禁止していません。しかし、それ以外、例えば、民間人を故意に飢えさせるなど、一般に“包囲”と捉えることができる特定の戦闘行為や方法を禁じています。

変容する市街戦の性質

人類の戦争の歴史において、私たちはさらなる分岐点に到達したと言えるでしょう。この中東三カ国における戦闘が既に示すように、将来の主要な戦場は、障害物の少ない広野ではなく、市街地や都市部で行われることが予想されます。紛争の前線に置かれた都市部の人々は、以下に挙げた困難を乗り越えなければならず、それらは互いに状況の悪化に拍車をかけています。

1. 包囲状態にある都市
2. 都市間でさまよう避難民
3. 電気や水、公衆衛生、ごみ収集、医療など、都市生活を維持するシステムの破壊・断絶
4. 人口過密地域での爆発性武器や化学兵器の使用、不発弾などの兵器による環境汚染
5. 絶え間ない攻撃や外出への恐怖、身近な人の死からくる精神的な影響



Alnas Kambal/ICRC

—ヤッセルの物語—

戦争に参加している当事者たちと関わるなんて、絶対に嫌でした。武装した人たちがこの地域に足を踏み入れたら最後。どれだけのリスクが生じるかということは、火を見るより明らかでした。

軍事拠点は、私たちが住んでいた場所の近くにありました。こちらに危害が及ぶことも予想されます。

そして、その通りになりました。

私たちの住宅は炎に包まれ、惨事に見舞われました。その攻撃によって、私の息子は窒息死しました。

建物の1階から3階までが崩壊したのです。彼が助かる見込みはありませんでした。

崩壊した瓦礫の下敷きになった私たちは身動きが取れず、逃げ出すこともできませんでした。こうした苦しみを、ほかの誰にも味わってもらいたくありません。

(2016年の) ラマダン中にアレッポ東部の包囲が始まり、状況はさらに悪化しました。人々は190日間、なす術もなく留まるしかなかったのです。何も機能せず、食べる物も飲み物もなく、常に空腹状態でした。食料を見つけたとしても値段が高すぎて手が出ず、レンズ豆をベースにしたものを口にするしかありませんでした。結果、私の体重は25キロ減りました。



Sana Farahshi/ICRC

街が戦場になった時

ICRC ペーター・マウラー総裁
都市型戦争を考えるシンポジウムでの
スピーチより抜粋
2017年11月28日 ジュネーブ

戦争の都市化は、地球上で暗澹たる状況を作りだしている重要な要素の一つです。街や都市部は、もともと脆弱なつくりのため、戦闘が与えるインパクトは大きくなります。特に貧困や基盤の弱いインフラを抱える都市では憂慮すべき点です。

今日の戦争は、都市名に結び付けられています：アレッポ、カンダハール、モガディシュ、ドネツク、アデン、ラマディ、サヌア、ファルージャ、クンドゥズ。世界中で約5000万人が都市部の戦闘行為の影響に苦しんでいると推定されます。

戦争の舞台が市街地となると、武装勢力は民間人に紛れ込んで同化しようとします。そうした行動の背景には、戦争のルールを無視している、他に選択肢がない、もしくは、意図的に隠れて、兵器などの軍事資産を守るために民間人を盾として利用する、ということが挙げられます。また、たいていの場合、街を支配することが戦略上重要とされます。

今日、私たちは多種多様な支援の提供を迫られています——水道設備の修理や設置から、病院や義肢・義足センターへの支援、そして巡回診療。少額融資による持続可能な小規模ビジネスへの支援なども行っています。

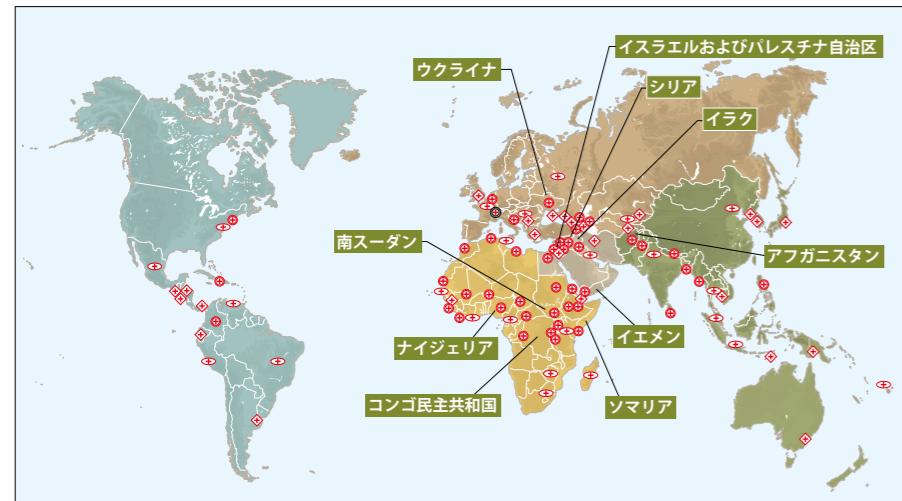
今日の都市型戦争は、殺害や破壊といった目に見える惨劇を生むだけでなく、教育機会を奪われた世代、精神的トラウマ、避難生活の長期化など、目に見えない傷あとを社会全体に残します。シリアでは、毎分3人以上が避難を強いられる状況に追い込まれ、一時的な避難所もしくは国内の別の地域に身を寄せる人は600万以上、また500万近い人たちが同国を去っています。

(5 ページに続く)

長期化する紛争

冒頭でも述べた通り、ICRCは、予算の約3分の2を長期化した紛争における支援活動に投じています。私たちが大規模に活動を行っている10の国や地域を見ると、平均活動期間は36年を上回ります。長期化した紛争は人類の苦しみの主要な要素で、いつまでも避難を強いられたまま家に戻れなかったり、開発が後退する原因となっています。

2016年に重点的に活動を行ったのは？



現代ならではの特性

歴史を紐解くと、戦争は長年にわたって続いていることが多く、私たちは過去70年間、そうした長い紛争下で人道支援を行ってきました。しかし、近年長期化してきている紛争には、特定の傾向を見出すことができます。多くが都市部で勃発し、戦略や通信に影響を与える新たなテクノロジーが用いられています。

今日の紛争は、貧しい国だけでなく中所得国にも被害を及ぼしています。そこには多くの人道支援機関・組織が存在し、さらに、世界中から昼夜休みなく働く多種多様なメディアが集まっています。紛争は現在、国家や文明社会がより意識的に国際法というレンズを通して論じています。ここでいう国際法とは、国際人道法、国際人権法、難民法を指します。

都市部における課題

新たな課題は、特に都市部において見られます。都市部では、インフラやシステムが発達し相互に連結していますが、それらを維持するうえで、大規模な技術的諸問題への対応と、職員確保の問題が生じています。

また、長期化した紛争下では、その継続性と暴力の激しさから、弱い立場に置かれた多くの人々に対して、持続可能で、個々のニーズを満たすサービスの提供が期待されます。しかし、こうした状況下では開発投資がなされないため、紛争中と紛争後の一貫した人道支援を保障する現地パートナーとの強固な協力体制を構築することが困難となっています。

助長される“負の連鎖”

教育の欠如、就職機会の不足、スポーツなど文化的、娯楽的活動へのアクセスがないこと、問題を抱えた思春期の若者を放置せざるを得ないことなど、これらすべてが精神的なプレッシャーを生み出します。そうすると、ギャングのメンバーになったり、性的暴行などの暴力行為や不法行為に走ったりすることに人々ははげ口を見出してしまいがちです。

家族や恋人など愛する人を次々と失ったり、目の前からいなくなったりする現実に向き合う人々は、耐え難い苦痛に耐えなければなりません。



オーストリアの国境付近にあるキャンプへ移動する避難民

おそらく、紛争の代償は測ることすらできないでしょう。子どもたちは教育と子ども時代を奪われました。全世代が未来への希望を持っていません。コミュニティはトラウマや不信感、憎悪によって分断されました。技術を持った人材が去っていききました。非常に多くの若者が暴力に巻き込まれてきました。

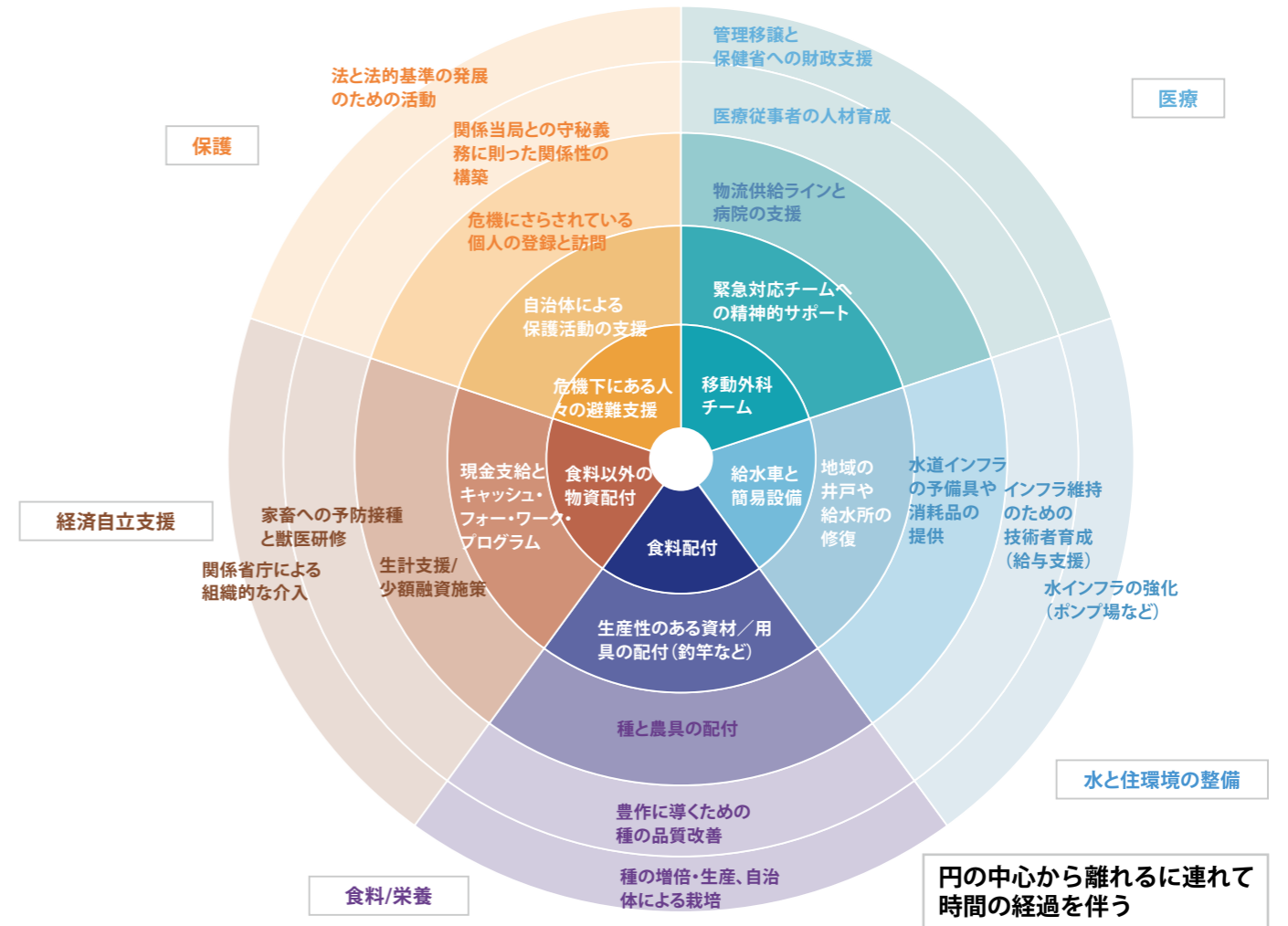
これが都市部における武力紛争の現実であり、多くの人々が避難を余儀なくされている理由なのです。

混乱は国境を超える

紛争が人道面に及ぼす影響は国境を越えて波及することから、巨大な社会的・経済的・政治的な圧力が、隣国へ、そして紛争からは遠く離れた国々にも加わるようになります。この圧力と混乱は何十年と続く場合があります。レバノン、ヨルダン、ギリシャ、イタリア、その他多くの国々では、到着する多数の避難民に対応するため苦闘しています。母国を去り、極めて危険な旅路を乗り越えて到着した人の多くは、出発時よりさらに弱い立場に置かれています。

大規模な人口移動の結果、受け入れ国の費用負担は増加し、追加のインフラ投資を行う必要が生じてきます。さらに受け入れ国は、社会の一体性が維持できるのか、国民の就業機会が奪われるのではないかと、深刻な懸念材料を抱え込むことにもなりかねません。これらの懸念材料は、受け入れ国内において新たな社会的対立を招き、政治利用されることもあるでしょう。政府や政治家が人道支援に関して強力なリーダーシップを持っていない限り、紛争の影響を受けて必死に対応している国家でも、国内世論が分裂して緊張状態が高まる可能性があります。

短・中・長期的ニーズに応える



ICRCの活動は、赤十字の基本7原則【人道、公平、中立、独立、奉仕、単一、世界性】と、国際人道法に則って広範囲に及びます。国際人道法は、「長期化した紛争」という言葉を法的に定義していません。同法に基づいた人道支援は、救援や早期復興、開発といったジャンルを越えて行われます。人々の生存を支え、その手段を提供するとともに、人間の尊厳を維持するために幅広く実践されます。

長期化した紛争下において支援活動を行う際は、当面のニーズに対応しつつ、累積被害の軽減も図るため、

短期と長期の計画からなる統合されたアプローチを採用します。

それには、同時に二つの時間軸における計画が必要となります。週単位の計画と、2年から5年先を見つめた計画です。私たちは、喫緊の人道ニーズに迅速に対応しつつ、人々の命を繋ぎ、尊厳を確保するために、健康面におけるサービスの提供や安全な水の確保、生計手段の維持、より広範には民間人の保護といった分野の活動に本腰を入れています。

(3 ページからの続き)

問題の長期化は、都市化に由来する構造的なもろさと相まって人々を苦しめます。世界では、極度の貧困層3億5000万人を含む15億人以上が、脆弱な環境、暴力、紛争が続く場所で暮らしています。こうした場所に暮らす人々には、収入の格差や貧困、若者の失業、暴力、犯罪行為、そして自然災害など、常に危険が伴います。また、犯罪組織の暴力やテロ攻撃にもさらされます。出口の見えないまま弱い立場に置かれ続けると、最終的に大量

の避難民を生み出したり、散発的な暴力の組織化や本格的な紛争への発展へとつながります。

私の結論を言います。そうした都市への対応は、何よりも新しいアプローチが必要です。短期と長期の両方の視点を伴ったものであること。そして、社会システム全体を見ながら個別のニーズにも応えること。人道支援と開発支援が融合されたものであること。これらの要素が欠かせません。

ICRCの対応

ICRCは、性暴力の被害者、子ども、居住地を追われた避難民、老人、障がい者、紛争被害者を受け入れているコミュニティなど、特定のグループから提起される保護と支援のニーズについて、それぞれの異なる具体的な内容の把握に努め、大きな成果を出してきました。サービスプロバイダーやコミュニティの回復力を強化する人道支援は、累積する影響を効果的に軽減させる対応と位置付けられ、開発成果の維持につながり、その後退を食い止めることができます。ここでは、私たちの活動のほんの一部を写真とともに紹介します。

インフラの支援

都市型戦争では、対立する両陣営を隔てる前線が、電気や水道・下水が通る部分を横断する可能性があります。相互に依存するこれらのネットワークが、異なる勢力の支配下に置かれるかもしれません。よって、長期化する戦闘において人々を生き延びさせ、健康を維持することは極度に複雑な課題なのです。これらの重要なインフラを尊重し、危害を加えてはいけないという義務をすべての紛争当事者に確認するとともに、攻撃で破損したら復旧するまでの間簡易サービスを提供します。現存する水や電気、衛生関連の事業を強化して、今日中東などで長期化している戦闘により耐えることができるよう、各国赤十字・赤新月社と連携しながら地域の水道当局やサービスの提供者と活動しています。



発電機のモーターを確認するICRCのエンジニア



治療方法の指導をするICRCの武器汚染専門家

化学兵器の処置

化学兵器は国際人道法で完全に禁止されています。イラクでは、通常の爆発性武器の使用や有害化学物質の放出によって生み出される大勢の死傷者に対処できるよう、病院や診療所の能力強化を支援しています。また、有害な化学物質にさらされた患者に向き合うための訓練を行ったり、医療施設の設備を整えたりしています。

ICRCの武器汚染ユニットがイラクとウクライナで講じた措置の一つは、化学物質や他の有害物質が貯蔵されているかもしれない工業地を特定することでした。この情報は、人口が集中する都市部付近の工業施設への、偶然ないしは意図的な攻撃により、大勢の死傷者が生み出されるという不測の事態に備えるためです。使用された際は厳密に追及し、すべての紛争当事者に完全な禁止と、国際法を遵守する義務を確認します。

長期化した紛争下でのアプローチ改善を図るための5つの方法

1. 民間人の保護と支援の両面で、より結果を重視した複数年にわたる計画を作成する
2. 単年ではなく、複数年にわたった財務管理を行う能力の向上を図る
3. 長期化した紛争によって開発が後退しないよう、開発成果の維持に努力を集中させる
4. 紛争中および紛争後も一貫した人道支援が行えるよう、現地における協力関係の構築を図る
5. 紛争により被害を受けた人々との関わりを深める

食料の供給と確保

食料危機まで至らないように、緊急的な食料支援に加えて、食料確保という観点からも問題を捉えます。活動の焦点を生存から生存手段へ、個人に食料を与えることからコミュニティや当局者との共同作業へと移行させます。また、包囲状態に置かれた人々は、1日1食の粗末な食事では何とか切り抜けているため、支援を行うためのアクセスを紛争当事者に求めます。



モスルの街に戻ってきた人々に食料などの支援物資を配付

不発弾への対処

不発弾は地下や瓦礫の中に放置されたままになっていて、都市部で生活する人々を重大な危険にさらしています。ICRCの武器汚染ユニットは、可能な限り、不発弾を発見し、除去し、破棄しています。都市を復興に導くには、まずは安全性が確保されないと投資も呼び込めません。また、現地の赤十字社、赤新月社を含む地域のパートナーと協力して、このような武器の危険性を一般の人々に教えています。



不発弾を探すICRCの専門家

—ハナンの物語—

私の夫は戦闘員ではありませんでした。彼は武器の運び方さえ知りませんでした。私たちには生まれたばかりの女の子がいて、タイズで戦闘が起こるまでは非常に幸せでした。そしてそのすべてが変わってしまったのです。

私たちの住む地域は、破壊や血、恐怖、孤独に満ちていて、近所の人たちはみんな去ってしまいました。

苦難に満ちていたある日、夫は買い物に出かけました。その帰りに、彼は近くの建物の屋根から狙撃兵に撃たれ、亡くなったのです。

その日、私の人生は終わりました。夫を失い、仕事と家も失いました。家賃を支払うことができず、実家に戻りました。父はわずかな収入で、私の7人の兄弟と、私と娘を支えています。

戦争が終わって、また子どもたちが学校へ通うのをこの目で見たいです。以前のように楽しそうに遊んでいるところを見たいです。小さな娘にも、戦争や命の奪い合いのない、よりよい将来を望みます。



Khalid Al-Saeed/ICRC

犠牲を減らすために

今日の都市型紛争の規模や範囲は、とうてい無視できるものではありません。何よりもまず、紛争に関わる人は人々の悲しみに対する政治的解決策を見出すため、一層の努力をしなければなりません。

紛争当事者には、「国際人道法を守る」という認識が必要です。広範囲に及ぶ破壊や無差別攻撃が、長期化した武力紛争の主要な手段・方法となるに従い、人々の被害も深刻さを増しています。戦闘が継続的ではなく散発的になったとしても、その爪あとが残ります。

国家は、国際人道法の尊重を保障するために全力を尽くさなければなりません。外国からの軍事支援は無数の武装集団を生み、紛争の影響を悪化させ、平和的解決をさらに困難にします。国軍であれ武装グループであれ、武力紛争の当事者を支援する国家は、その犠牲者のために影響力を行使しなければなりません。

また、紛争当事者や彼らを支援する国家だけでなく、国際社会、人道支援組織、ドナー、そして世界中の一般市民が、緊急かつ長期的にかかわっていく必要があります。

右に記した10項目は、ICRCの勧告です。紛争がもたらす苦しみを減らし、人々の喫緊のニーズに対処することが緊急に求められています。

1. 紛争当事者は、常に国際人道法を尊重すること。敵方がどんな行動を取ろうと、こちら側が法を犯す理由には絶対なりません。
2. 紛争当事者を支援する国家は、その当事者が国際人道法を尊重することを保障すること。
3. 紛争当事者が民間人を包囲下に置くことをやめ、都市部で助けを必要としているすべてのコミュニティに対して、迅速かつ継続的で障害のない人道援助へのアクセスを保障し、人々が逃げることを望んだときには安全な移動を保障すること。
4. 紛争当事者は、人口過密地域で広範囲に被害が及ぶ爆発性武器の使用を避けること。
5. 紛争当事者は、生命を維持するための都市の入り組んだシステムを尊重し、保護すること。
6. 紛争当事者や国際社会は、人々を強制退去させるのをやめ、国内避難民の権利を尊重して彼らのニーズに対処すること。
7. 政府当局や国際社会は、紛争国からの避難民を保護し、支援すること。
8. 政府当局や紛争当事者、国際社会は、必要不可欠なサービスを提供する人々や人道支援従事者が確実に保護されるように力を尽くすこと。
9. 政府当局や人道支援組織、国際社会は、暴力の犠牲者が適切な心理社会的サポートやメンタルヘルスの支援を確実に受けられるよう、より労力をつぎ込むこと。
10. 政府当局や人道支援組織、国際社会は、インフラ再建だけでなくコミュニティの再建も支援すること。

包括的な和解への取り組みに国際社会が携わるための対策を講じて、断固とした協調行動を取れば、都市やコミュニティは再建され、破壊された地域はより速く復興を遂げることができるでしょう。たとえば・・・

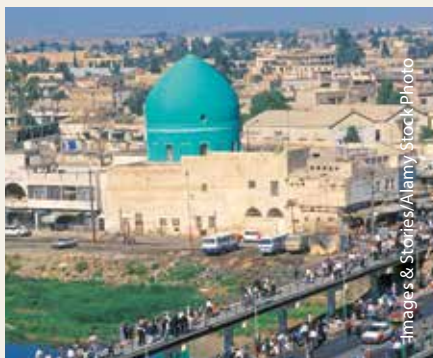
…シリアのアレッポは、雷のような爆音とともに降り注ぐ爆弾や倒壊する建物ではなく、食文化や音楽で、世界に再びその名を轟かせることになるでしょう。



Jens Berninghofen/Alamy Stock Photo

シリア北部の都市アレッポ

…イラクのモスルは、路上での激しい戦闘ではなく、中東地域における学問や医学、石油生産の中枢として、世界に再び繁栄を示せるでしょう。



Images & Stories/Alamy Stock Photo

チグリス川が流れるイラクのモスル市

…イエメンのタイズは、道路に放置されたゴミの悪臭ではなく、その独特な建築とすばらしく香りのよいコーヒーによって、世界の人々に再び記憶されるでしょう。



Prisma by Dukas Presseagentur GmbH/Alamy Stock Photo

イエメンのタイズ州にあるアル・アシュラフィヤ・モスク

紛争以前のシリア、イラク、イエメン

今日の紛争ではあまりにも多くのものが失われています。私たちにできることは、平和を支持し、紛争を一日も早く解決に導くことです。そこから目指すのは、いつか、アレッポの若い音楽家が、モスルの医学生が、そしてタイズの街角にオープンした小さなコーヒーショップの店主が、「私はこの目で自分の街が生まれ変わるのを見ました」と言える日が来ることです。



ICRC

赤十字国際委員会 (ICRC) 駐日事務所

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-11-36 レジデンスバイカウンテス #320
TEL : 03-6628-5450 / FAX : 03-6628-5451

ICRC駐日事務所

検索